令和２年度禅文化歴史博物館紀要刊行のご挨拶

駒澤大学禅文化歴史博物館長　村松　哲文（仏教学部教授）

2021年4月、禅文化歴史博物館長に就任致しました。博物館勤務は実に20年ぶりになります。かつて本館と同じような形態の大学博物館で学芸員（身分は助手）の仕事をしていました。大学院博士後期課程が満期をむかえ、事務所に退学届をもらいに行き、来年からどうしよう、という時に指導教授に声をかけてもらった瞬間の安堵感は今でも覚えています。

しかし、そんな安心感は働き始めたら全てなくなりました。前任者が企画していた展覧会の準備がすぐにスタート、のんびりした学生時代の空気が一変したのを覚えています。すでに経験を積んでいた同僚や事務の方には、とても助けてもらいましたが、毎日仕事に追われる日々が続きました。

私が働きだした時は、開館してまだ4年目でした。勤務した博物館は、大正14年に建てられた図書館を修復して再利用した建物なので、エレベーターもなく、車椅子の方が来館されると2、３人で持ち上げて階段を昇ったり降りたりしていました。また展示室の空調は､公開時間だけつけられており、職員が帰る時には切られます。今では信じられませんが、空調の入っていない夏休み期間中、二三日おきに展示ケースのカビを拭き取っているような状態でした。その当時、一番の懸念は、博物館の入り口が鉄扉だったことです。現在はガラスの自動扉になっていますが、その頃は重い鉄扉を押して博物館に入ってくる学生や教職員はほんのわずか、来館者数は伸びず、展覧会を企画し運営している者からすれば、忸怩たるものがありました。現在は、施設面での問題が解決され内外に知られる博物館になっており、名実ともに大学の看板になっています。

さて、禅文化歴史博物館は、来年には開館20周年を迎えます。20年は人間でいえば社会的に認められる立場になります。本館は、2006年には博物館相当施設に指定されており、博物館としては整った施設です。しかし、入館するのに数段の階段を昇り、さらに重い鉄扉を押して入るなど、改善の余地はまだ残されています。

大学博物館は、学内で唯一、学生以外の一般の方にも開放されている施設です。「社会教育法」によれば、博物館は図書館、公民館とならぶ社会教育施設となっています。そうした意味でもより多くの方に博物館に足を運んでもらえるようにしなければ､社会的な義務を果たしているとはいえません。そのためにも博物館のサイバーミュージアム化など、禅文化歴史博物館の面白さを世界に発信していきたいと考えております。博物館の発展が、すなわち駒澤大学の発展につながることはいうまでもありません。20周年という節目を前に、今一度博物館の在り様、果たすべき役割などを振り返り、さらに大きく発展できるように、一つ一つ着実に歩んでまいります。